附属病院
訪問

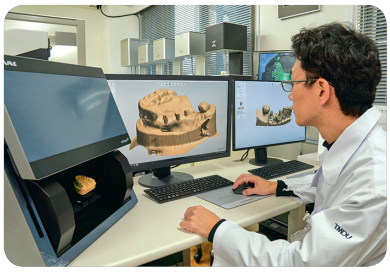
歯学部附属病院
歯科技工部 Real Mode Studio
リアルモードスタジオ

匠の技とデジタル技術の融合で高度な歯科医療を実現

鈴木哲也歯科技工部長。「人の口腔内は一人ひとり、色や形が違いますから、最後の色づけや研磨といったところは歯科技工士の手作業です。最後の命を吹き込む部分は歯科技工士でないとできません」

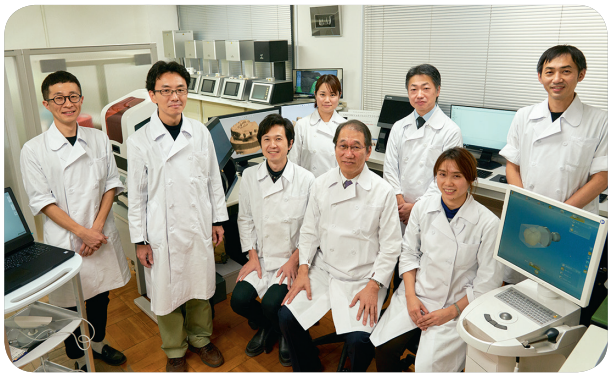
松原恒歯科技工部技師長。「先端歯科診療センターと連携することで、より高度なデジタル歯科医療“デジタルデンティストリー”の実現を目指しています」

口腔内の状態がデジタルデータで保存されているので、補修などの際に型取りをし直さなくてよいというメリットもある。



ジルコニアやセラミックで作られたクラウン、インプラント義歯。仮歯やマウスピース、治療に使う装置等を3Dプリンターで作ることもある。

小型カメラで撮影して3次元デジタルデータに変換する口腔内スキャナー。



歯科技工部は、約30名の歯科技工士が所属する職人集団。

入れ歯や歯の被せ物などを作るには、歯科技工士という職人の技が必要とされる。そこに最新のデジタルテクノロジーを導入した「Real Mode Studio（リアルモードスタジオ）」が、2018年5月、歯科技工部に開設された。

従来の金属クラウンは、シリコン型から石膏模型を作り、ワックスから作られた鋳型に金属を流し込んで鋳造し、研磨していた。その全工程を歯科技工士が手作業で行う。

Real Mode Studioでは、これらをほぼ全てデジタルで実現。口腔内スキャナーで撮影した口腔内データを元に専用ソフトウエアで歯をデザインする。歯の欠けている部分はデータ上で補う。セラミックス材料の削り出しから焼結まで、一連の流れをスタジオ内の機器で行うことが可能だ。

「デジタル機器を扱う施設というだけでなく、高い専門技術を持つ歯科技工士たちによりデザインされる工房という意図を込めて“スタジオ”と命名されました」と、鈴木哲也歯科技工部長は話す。

「歯科治療の現場と隣接しているので、直接患者さんの口腔内を見て、歯科医師と連携をとりやすいという強みもあります」とは、松原恒歯科技工部技師長。Real Mode Studioをきっかけに、東京医科歯科大学の歯科治療レベルのさらなる向上が期待できる。 B